

世界文学紀行 続編

以下の文学作品についての記事はその舞台を直接に訪ねて書いたものではありません。現役時代にその舞台となる国・都市を訪れたときの経験を思い出しながら綴ったものです。作品からは少し外れた内容のレポートもありますが、幅広い意味での体験や考えを知っていただければと、先の 15 作品に続いてご紹介します。

紹介している作品（この順番です）

「最後の一葉」	「賢者の贈り物」	O・ヘンリー
「老人と海」		アーネスト・ヘミングウェイ
「百年の孤独」	「族長の秋」	ガルシア・マルケス
『カルメン』		プロスペル・メリメ

番外編 [名曲の舞台を訪ねて](#)

「ある恋の物語」
「ベサメ・ムーチョ」

.....

「最後の一葉」 O・ヘンリー

短編の中に心温まるメッセージ



ニューヨークはこれまでに 4 回訪問した。それぞれに特別な思い出がある。O・ヘンリーの生家も博物館も作品の舞台ワシントン・スクウェアも訪ねてはいないが、これまでの訪問時の出来事や思い出にからめて「最後の一葉」について綴った。

印象の鮮烈さはやはり第 1 回目だった。1976 年 7 月。アメリカでは独立 200 周年を祝う行事が各地で催されていたさなか、ニューヨークでは NSA コンベンションが行われた。

（NSA とは Nichiren Shoshu of America の略称だったが、現在は SGI-USA <Soka Gakkai International of the United States of America> となっている）

その年の 3 月、私は聖教新聞のパナマ特派員に任命となった。それから必要な種々の研修を受けた後、6 月末に同コンベンションの取材記者と一緒に渡米、各行事を取材してその足でパナマに南下したのだった。

コンベンションでは 5 番街で NSA メンバーによるパレード、ヤンキーススタジアムでの試合合間の演技、市内の映画館で「人間革命」（英語字幕）の上映などがあった。5 番街といえばニューヨークでも最も有名な通りである。暑い 7 月の初め。パレードは陽の落ちた夕方から行われた。私は本社から特派員用に貸与されたばかりのニコンのカメラ 2 台を首にかけ通りに出た。と、すでにアメリカ駐在 2 年になる先輩特派員から忠告された。

「清水さん、新品を 2 台も持っているとは狙われるよ！黒人の大男に上からガツンとやられて・・・」。日本人の中でも小柄な私は海外で初めて、しかも治安が悪いニューヨークでの

取材活動にことのほか気を遣った。あれから 37 年余り。途中、同市は「9.11」という大事件にも遭遇してきたが、当時は怖かった地下鉄に今は安心して乗れるようになった時代の流れに感慨も深い。



2 回目は 1984 年の 3 月。赴任地パナマにいた家族の一時帰国が許され、私も休暇を取りアメリカまで同行した時だった。北海道ほどの小さなパナマから出たこともない家族を、この機会に広大なアメリカ大陸の東海岸ニューヨークと西海岸ロサンゼルスへ案内兼通訳で訪れたのである。私たちはエンパイヤステイトビルに上ったり街中の散策を楽しんだ。シャトル便と列車で首都ワシントンも往復した。

熱帯パナマから降り立ったニューヨークは、3 月というのに肌に風が冷たかった。ワシントン・ポトマック河畔の桜も蕾が少しだけふくらみかけていたところだった。

3 回目は 1993 年。すでに帰国していた私は東京の本社からパナマに出張する途上だった。直行便はない。アメリカ国内のロサンゼルス、マイアミ、ヒューストン、ニューヨークまたはメキシコシティで乗り換え一泊しなくてはいけない。ニューヨークを乗継市に選んだ私はそこで今思い出してもゾットとする事件に遭遇した。二人組の白タクに引っかかってしまったことである。まかり間違えば今この世にいなかったかもしれない。この辺の事情は HP 「エッセイ・コラム」 欄の「コワかった海外取材での体験」に綴っている。

そして直近では 2007 年。すでに定年 6 年目に入っていたが、縁がありお世話になったパナマ S G I の応援のために同国を訪問した帰途のことだった。特派員として赴任していた当時お世話になった婦人 N さんが今はニューヨークに住んでいた。そこでパナマからの帰途に寄ることになった。ところが自分の思い違いでとんでもない空港に降り立ってしまったのだ。

「ニューヨーク」と「ニューアーク」と取り違え、ニュージャージー州のニューアーク空港に降りたのである。やむをえず、そこからニューヨークのダウンタウンまでなんとタクシーで乗り付けた。幸い 100 ドルに満たない料金ですんだ。(こちらも上記の体験談集で紹介している) 広大なアメリカでも州が違う両市がたまたま隣り合わせていたラッキーさに心から安どしたものだ。

歴史的な建造物でもある S G I のニューヨーク文化会館ではほぼ 20 年ぶりに N さんと再会し抱擁、近くの庶民レストランで一緒に夕食をしたのが、暗くなった街角の光景とあいまって忘れられない思い出となっている。

「最後の一葉」はそんな記憶が残るニューヨークを舞台としている。木々の葉が落ち、寒い冬に入る前の、胸を打つ心温まる物語である。以下は「気まま随想」(2008 年 11 月) に載せたエッセイから――



落ち葉の季節からクリスマスのシーズンへ。この時期に思い出されるのは O・ヘンリーの小説です。「最後の一葉」と「賢者の贈り物」――この二つは氏の多くの短編の中で、日本で

最も読まれている作品でしょう。

私の作品との出会いは、高校時代の英語の教科書でした。短編であること、内容がわかり易く教訓的な面もあること、使用されている英語も比較的易しいこと、などから教材として最適だったのでしょうか。この文をお読みの皆様の中でも、どこかで原文の一端に触れた方も多いのではないのでしょうか。

「最後の一葉」 (The Last Leaf)

——芸術家を目指す人々の集まるワシントン・スクエアのある一角。ジョンジーは街で出会ったスーと共に、アパートに小さなアトリエを持っていた。彼女は肺炎に犯されていた。

「彼女を生かすのは、治療よりも、むしろ生きようとする意志なのだ」と医師が言う。しかし、ジョンジーは外にある木を見ながら、自分の死期ばかりを考えていた。

「あの木の最後の一葉が落ちたとき、自分は死ぬのだ」。スーは彼女のそんな姿を見て、どうしたらいいか困り果てていた。

アパートには、もう一人、偏屈な老人が住んでいた。

「いつか自分の傑作を作る」。それが口癖だった。そして、その夢をかなえることのないまま老人になってしまった。スーはジョンジーが肺炎で生きる希望を失っていることを老人に告げた。



冬を迎え、木からは一枚また一枚と葉が落ちていった。やがて、嵐が訪れた。嵐が過ぎた翌朝、ジョンジーは窓を開けた。木には、最後の一葉だけが落ちずに残っていた。激しい嵐の中でも落ちなかった葉っぱを見て、彼女は再び生きる希望を持った。やがて、肺炎からも回復した。

同じころ、同じアパートのあの老人が肺炎で亡くなった。なんでも、あの嵐のなか、玄関にびしょ濡れでいたらしい。そう、実は最後の一葉は、煉瓦に描かれた一枚の絵だった。それは、老人の描いた最初で最後の傑作だったのだ。

・・・この短編で、作者は何を訴えようとしたのでしょうか。「自分の命と引き換えに若い命を救った」「本物の芸術のために自分の命をかけた」など、いろいろと解釈されるでしょうが、私は文中の医師の言葉に注意を引かれます。

——医者と言った。「わしの努力が及ぶ限り、あらゆる療法を施してみよう。しかしな、あの娘が自分の葬式の列での車の数を数え始めたら、医薬の効能がふつうの5割ぐらいになるとしてもらいたい。あんたが彼女に外套の袖のこの冬のニュースタイルについての質問をさせることができれば、十の一つだった可能性が五の一つになると約束しよう」

.....

別の随筆やレポートで紹介した赤毛のアンのように、すべてを前向きに明るくとらえていく心こそが、病を治し、人生を開いていくカギだと思うのです。

せっかくなのでこの機会に0・ヘンリーのよく知られた別の短編も触れておきたいと思います。

「賢者の贈り物」(The Gift of the Magi)

—ある貧乏な若夫婦。クリスマスだというのに、お互いに贈り物をするお金すらない。でも、それぞれに素晴らしい宝物を持っていた。妻のデラは皆が褒め称える美しい髪を、夫のジムは誰もが羨む立派な金時計を・・・



二人はそれぞれに決断する。妻は夫の金時計にふさわしい鎖を買うために、大切な髪を売ってしまった。夫もまた、妻の美しい髪を梳く櫛を買うために、大切な金時計を売ってしま



まったのだ。

クリスマスの当日。二人がプレゼントしあったものは、結果的にお互いにとって役に立たないものとなってしまった。でもこれは、どんなものよりも、相手の胸に届く“心の贈り物”となった。

短い物語に込められた強く深いメッセージ。私の信奉する日蓮大聖人の御書(論文や弟子への手紙等をまとめた一書)でも次のように言っています。

「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財よりも心の財第一なり」——財産や高価な物より健康な身体が第一。そして身体よりも心の宝こそが第一との意味。やはり、人の心を打つのは人の心なのです。

「老人と海」 アーネスト・ヘミングウェイ

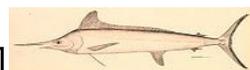
キューバで作家生活の半分を過ごす

以下はネットからのコピーです。

『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)は、アーネスト・ヘミングウェイの晩年の海洋小説。1952年に出版された。名作として世界的なベストセラーとなり、ヘミングウェイの1954年のノーベル文学賞受賞には、この作品によるところが大きい。

作品の着想は、キューバの首都ハバナから東に7km行ったコヒマル(英語版)(西 Cojímar)という漁港の漁師の話、巨大なカジキを釣り上げた老漁師の実話から得たという。ヘミングウェイは、釣りボートが嵐で遭難しかかってその港にたどり着いたことがあり、頻繁にここを訪れていた。悲劇的なストーリーには厭世的な晩年の心境も反映しているものと見られる。

あらすじ



キューバの年老いた漁師のサンチャゴは、助手の少年と小さな帆かけ舟でメキシコ湾の沖に出て、一本釣りで大型魚を獲って暮らしを立てている。あるとき数ヶ月にわたる不漁が続

き、少年は両親から別の船に乗ることを命じられる。一人で沖に出たサンチャゴの針に、巨大なカジキが食いついた。3日にわたる孤独な死闘ののち、サンチャゴはカジキを仕留めるが、獲物が大きすぎて舟に引き上げることができず、舟の横に獲物を縛りつけて港へ戻ることにした。しかし魚の血の臭いにつられたアオザメの群れに追跡され、必死の闘いにかかわらず、カジキはサメに喰いつくされていく。ようやく港にたどりついたとき、カジキの体は巨大な骸骨になっていた。少年がサンチャゴの小屋にやってきたとき、老人は古新聞を敷いたベッドで眠りながら、船員だった若い頃にアフリカで見たライオンの夢を見ていた。

作品は大学を出てNHK学園高校の教諭をしていたころに読んだ。似たような内容の作品にハーマン・メルヴィルの「白鯨」がある。

船長のエイハブは、かつてモービー・ディックと名づけられた白いマッコウクジラに片足を食いちぎられ、鯨骨製の義足を装着していた。エイハブ船長は白鯨に報復を誓い、数年にわたる捜索の末、日本近海の太平洋でモービー・ディックを発見・追跡するが、死闘の末に船長は白鯨に海底に引きずり込まれ、損傷した船も沈没し、乗組員の全員が死亡する。ひとりイシュメイルのみが、漂流の末に他の捕鯨船に救い上げられる、というストーリーだ。

——どちらの作品も、とてつもなく巨大な獲物と人間の格闘を描いている。前者はカジキで舞台は大西洋、後者はクジラで舞台は太平洋だ。広大な海の舞台には並はずれた大きさの魚が似合うのだろう。

ただし、「老人と海」の絞り込んだ舞台はメキシコ湾だ。私はその隣りのカリブ海上空を何回も飛び、高度約1万メートルから紺碧の海の青さを堪能したものだ。パナマシティからサントドミンゴへ、マイアミからパナマシティへ、そしてメキシコ・シティからハバナへと、どれもSGI (Soka Gakkai International) メンバーの激励と聖教新聞の取材のためだった。

キューバの首都ハバナへは2回訪問した。

1回目は1984年。メキシコを訪問した機会だった。当時はキューバに入るためには、原則としてキューバ政府の招待によるか、現地に身元引き受け機関のある場合か、観光団体の一員としてしか許されなかった。一般旅行者は、本国紹介もあり、ビザの発給まで1～2ヵ月かかった。報道関係者は特別に扱われたが、それでもさまざまな複雑な手続きを踏まなければならない、入国経路もごく限られていた。



モロの要塞前で

各国の特派員が最も利用する経路はメキシコからの入国だった。メキシコ・シティ——ハバナ間にはクバーナ・デ・アビアシオン(キューバ国営航空)とメヒカーナ・デ・アビアシオン(メキシコ航空)が飛んでいた。メキシコは、米州の中でも特にキューバに理解のある国であり人と物の頻繁な往来もある。たまたま筆者のメキシコ滞在中、フィデル・カストロが亡命中でまだお金のなかったころ“つけ”で食べ飲んでいったというアラメダ公園近く

のレストランに寄った。そこの主人いわく。「伝票にフィデルのサインが残っているよ。これをもとに請求書も送れるけど、これは今となっては家宝のようなもんだからね」

パナマに駐在していた私は4月初め、メキシコから中米各国を訪問することになったとき、社会主義国に仏教徒が誕生したという便りを耳にした。キューバはもともとカトリックの国である。一体、市民は社会主義と宗教と生活をどう捉えているのか。そして国際政治との関係は？こんな湧き上がる疑問にひかれて、私はメキシコ訪問の機会を利用して、思い切ってキューバまで足を伸ばしたのだった。

まず、メキシコ市にあるキューバ大使館に入国ビザを申請した。横30センチ、たて40センチほどの大型の申請用紙は両面印刷で3ページに及ぶ。小さな活字でぎっしり詰まった項目の中には氏名、年齢、職業、学歴は当然ながら両親の名前、思想経歴、宗教および政治活動歴と詳細にわたっている。しかも顔写真は3枚が必要だった。それまでラテン・アメリカ10数カ国を回った中で、これほどの質問・調査項目に会うのは初めてだった。

幸いにも愛想のよい受付嬢の好意で、私の場合、特例的に4日間という短時日でビザが発給された。ただし、滞在期間は3日間と限られた。かくして第一の“堰”を乗り越えた私は、メキシコ空港からハバナ行きのクバーナ・デ・アビアシオンに乗り込んだのであった。



ハバナのマレコン通り

(以下はHP「ラテン・アメリカからのメッセージ」の「かいま見たキューバ事情」に詳しく綴っています)

2回目は1996年。池田SGI会長がキューバを訪れカストロ議長とも会談をした。このとき地元キューバおよび各国からの特派員の話題になったのは、「いつもは軍服姿の議長が背広とネクタイ姿でSGI会長を迎えた」ことだった。「平和の指導者をお迎えするには当然のこと」と議長は語っていたという。

その少し後に東京富士美術館の至宝展がハバナ市で開催され、日本から交流団も派遣された。そのとき私も同行記者として2度目の訪問となった。そしてこのとき、交流団と一緒にヘミングウェイが住んでいたハバナ市内の家を訪れたのだった。

家はフィンカ・ビヒアとして知られており、現在では博物館として屋敷の一部が公開されている。ヘミングウェイが人生の3分の1を暮らした場所。白い壁の部屋でキューバの葉巻を吸い、ダイキリをたしなんている氏の姿をほうふつとさせる風情だった。2008年にはアメリカの修復グループが改修工事をすませ、現在ではもとの状況を保っている、という。「老人と海」を読んでハバナを訪れると、前に広がるカリブ海（大西洋）がメキシコ湾までつながっていて、そこにはいかにも大きなカジキが生存し泳いでいるような想像まで湧いてくる。

第一回目の訪問から約30年（2013年の時点）。伝え聞くこの間のキューバの変貌は著しい。高齢からカストロ首相は表舞台から降りたが政治の基本的方針は変わっていない。一方で国は観光を全面的に売り出していて、訪れる日本人観光客も結構な数のようだ。

もう一つは、元来カトリックの国だったキューバが社会主義化し、宗教に制限が設けら

れていたのが大幅に変わり今は仏教徒（SGIメンバー）も多数誕生していることだ。思い返せば、私が初めて訪れた際には、モノが豊かでないことや産業の近代化が遅れているのが目についたが、教育が進んでいること、医療が整っていること、そして治安の良さはラテン・アメリカでも随一だった。

そんな経過から私はキューバをとっても好きになっていた。ヘミングウェイがここで作家生活の半分を過ごしていたのがわかるような気がする。



ハバナの女子高生たち

「百年の孤独」「族長の秋」 ガルシア・マルケス

豊かな幻想的世界を創り出す

1982年、スペイン語圏のコロンビアからノーベル賞作家が輩出した。そのころ私は聖教新聞特派員としてパナマに駐在しており10年間、ラテン・アメリカ諸国を訪問していた。国境を接する南のコロンビアも5回以上訪れたことのある身としても関心が深く、さっそく氏の代表作『百年の孤独』と『族長の秋』を手にとってみた。

マルケスのスペイン語の原文は難解のため鼓直（つづみ だし）訳によった。一時、氏による翻訳についての講義を信濃町にある日本スペイン協会でもあり、その翻訳力に感銘していた経過もあった。



マルケスは1928年、コロンビアのカリブ海沿岸にある人口2000人ほどの寒村アラカタカに生まれた。事情により両親と離別し、祖父母の元に預けられて幼年期は3人の叔母と退役軍人の祖父、迷信や言い伝え嗜好きの祖母と過ごした。『百年の孤独』および一連の小説は、祖父母が語ってくれた戦争体験や近所の噂話、土地に伝わる神話や伝承に基づくところが大きい。特にマルケスに影響を与えたのは祖父で、『落葉』の老大佐、『大佐に手紙は来ない』の退役大佐、『百年の孤独』のアウレリャーノ・ブエンディアーア大佐などのモデルになったと言われている。

『百年の孤独』はホセ・アルカディオ・ブエンディアーアを始祖とするブエンディアーア一族が蜃気楼の村、マコンドを創設し、隆盛を迎えながらも、やがて滅亡するまでの100年間を舞台としている。幻想的な出来事、個性豊かな人物が登場。生と死、希望と絶望などを織り交ぜながら、ブエンディアーア家の孤独の運命について描いている。



グラン・コロンビア

その後に出た『族長の秋』は政治風刺色が強い。作品は6章仕立てになっていて独裁者を描いたものだが、章が変わるまでいっさい改行がないというかなり特殊な書き方で描かれている。年齢は232歳とも言われる大統領の一生の盛衰と、そのダロテスクなまでの悪行とを次々に明らかにしていく。しかし、それらの語りが浮き彫りにするのは、孤独にくずおれそうなひとりの男の姿だった。独裁者の姿を寓話的に描くという、大きな物語でありながら人間としての孤独にアプローチしている様が、静かな余韻を残す。

こうした作品が評価されてマルケスはラテン・アメリカで4番目となるノーベル文学賞を受賞した。「現実的なものと幻想的なものを結び合わせて、一つの大陸の生と葛藤の実相を反映する、豊かな想像の世界」を創り出したことに受賞の要素があったといわれる。

それにしても1970年代、軍事独裁政権に支配されていた国が多かったラテン・アメリカ諸国を回っている間に、マルケスの描くような世界をいたるところで見えてきたような気がする。

コロンビアでは標高2600^{ft}の首都ボゴタ、地方都市メデジン、カリ、カリブ海沿岸のカルタヘーナ、そしてカリブ海に浮かぶ島々などを訪れた際には、やはりそんな雰囲気を感じ出しているような気がした。それにパナマのノリエガ將軍などは『族長の秋』のモデルにさえなったかもしれない。



高山首都ボゴタの遠景

『カルメン』 プロスペル・メリメ

情熱的、だが危険な女か！？

スペインを舞台にした小説『カルメン』(*Carmen*)は、フランスの作家のプロスペル・メリメによって書かれた中編小説。メリメは執筆前に2回スペイン旅行をしており、その1回目の旅行の際に「カルメン」の題材を思いついた。

作品では作者に仮託される考古学者がスペインで出会ったある山賊の身の上話を紹介するという体裁でカルメンの物語が描かれる。彼はカルメンという情熱的なジプシー女に振り回されたあげく、悪事に身を染めてお尋ね者となり、ついには死刑となる。

原作ではスペインの民族構成の複雑さや、下層社会の抱える困難、荒涼とした風土などを背景に、ある孤独で勤勉なバスク人の男が情欲のため犯罪に加担し、やがて破滅するというストーリーであり、基調としてはけっして華やかな物語ではない。



心に影をもち、激しく恋に燃えるが心変わりしやすく、男にとっては危険な女というカルメンのイメージは、オペラ『カルメン』(1874年初演)でさらに強調して描かれることになる。竜騎兵ドン・ホセはカルメンに誘惑され、婚約者を捨てて軍隊を脱走する。しかしカルメンは闘牛士に心を移し、嫉妬に狂ったドン・ホセは七首を持って追いかけて、カルメンを刺し殺すのである。

カルメンという名はスペインではごくありふれた女性名であるが、こうして世界中に知られるようになったことにより、「カルメン」的性格がスペイン女性の特徴のように言われたりもする。もっとも設定のようにカルメンはジプシーの女(ボヘミア人)でありスペインにとっては異邦人であり、ドン・ホセがスペインの「内なる外」バスク少数民族であり、また語り手である「私」もまたフランス人であることなど、この物語の背景にある複雑な「内と外」の問題はそのままヨーロッパ社会のはらむ文化の「内と外」の緊張感を構成しておりこの小説の重要なプロットとなっている。(以上、ウィキペディアからの要約)

セビリア大学の舞台を訪ねて

マドリード駅から夢の特急AVEで南方面に約2時間。セビリア駅は1992年の世界万博を機に(同じ年、北東のバルセロナではオリンピックが開催された)大きく整備されたようだ。天井も高くなかなか壮麗である。

メリメ作「カルメン」や、ポーマルシェの戯曲「セビリアの理髪師」の舞台となったセビリアは闘牛、フラメンコの本場である。市の端を流れるグアダルキビル川は、コロンブスを初めとする大航海時代の立役者が、さらには約400年前、仙台伊達藩の支倉常長が足跡を印している。

イスラム支配時代の大モスクを基礎として建てられたカテドラルは、ゴシックとルネッサンスの混合様式で、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂、ロンドンのセント・ポール大聖堂と並ぶ世界三大大聖堂の一つとなった。カテドラルの鐘楼塔・ヒラルダの塔の高さは約98メートル。地上70メートルの高さまで、回り階段とスロープで上ることができる。展望台からのセビリア市内の一望もすばらしい。

そこから歩いて10分ほどでセビリア大学へ。大学の建物は18世紀に建てられた旧王立タバコ工場。「カルメン」の舞台を偲んでみたい、との思いがあったからだ。



セビリア大学正面玄関

——スペインを旅行中の考古学者は今獄中にいる山賊ホセを知る。ホセは形見の銀メダルを母親に渡してくれと学者に頼んだのち、懺悔話を始めた。それは、純情な青年が情熱の女カルメンに翻弄され、闘牛士や彼女の情夫、果ては彼女まで殺してしまう悲しい物語だった。歌劇とはまた異なる沈痛な激情に貫かれたメリメ(1803~70)の最高傑作。(「カルメン」メリメ作・杉捷夫訳)

人間の本能の奥までえぐるような、ときにドロドロとしたものを流しながら語られる男女の愛。それは、現実を超えたものでありながら、誰の心の奥にも潜んでいる感情、本能を、ホセとカルメンの言葉と行動を通して吐き出させている——日本語訳は文庫本で100ページほどの短編だが、凝縮された内容の濃さに惹きつけられたものだった。そんな物語のあらすじを思い出しながら、今は大学の法学部となっている建物の事務室の女性に、ホセとカルメンの最初の出会いの場所を尋ねてみた。

ところが——。

「エッ！ そんな話 は知りませんねえ」との意外な返事。

「ホラ、『タバコ工場の入り口で……』と、物語には書いてあるんですけど」

「じゃあ、きっとこの大学の正門のところじゃないかしら」

勤務時間外で事務室にはほかに聞ける人もいない。学生たちもまだ夏休みで構内にあまり見あたらない。日本では人気のある小説も、地元では意外にこんなものかもしれない。いや、作者のメリメがフランス人であることから、関心が薄いのもかもしれない。

あの名著「ドン・キホーテ」も、前・後編を完全に読み通したことがある人はスペイン人でもそんなにいないという。ひるがえって「源氏物語」を読み通した日本人もそんなに多くないのと同じことかもしれないが……。

ともかく、正門近くのたたずまいをカメラに収めた。大学を取り囲む塀の壁には、セラミックで作られた「タバコ工場」との掲示が今も5～10メートルおきにあるのも、当時を彷彿とさせていた。

人生の哀歓を表現したフラメンコ

夜10時、フラメンコのショーを見に闘牛場近くにあるタブラオ（フラメンコが演じられる小劇場）に行った。ジプシーたちの伝統的な舞いとアンダルシアの激しい情念と哀愁が融合して生まれたというフラメンコ。絞り上げる叫びにも似た歌声、熱いギターの色々とともに、踊り子たちの舞台にたたきつけるような靴音が胸をかきたてる。踊り子の手や指の微妙な動きは、人生の哀歓を表現しているという。

この日、場内の観客約100人のなんと 3 割ほどは日本人だった。2組の団体観光客と、あとは小さなグループまたは個人のように思えた。市内にはフラメンコ教室に留学している日本人も多いようだ。「本国スペインの次に、あるいはそれ以上フラメンコが人気のある国は日本」といわれている。そうかもしれない。



番外編 名曲の舞台を訪ねて

「ある恋の物語」 歌は世界の人々の心をつなぐ

“Ya no estás más a mi lado corazón, en el alma solo tengo soledad”

(もう 君は私の心の側にいない。私の魂に残っているのはただ孤独だけ)

恋の破綻と不遇を嘆く美しい詩である。それにもまして、明るい哀調を帯びた曲の美さが、世界中のラテン音楽愛好家の心を取りこにしてきた。

作詞・作曲はパナマのカルロス・エレッタ・アルマラン。彼は1918年、パナマに生まれたが両親ともに生まれはスペインだった。彼自身も中学校まではパナマで学んだが、スペインのマラガで高校を卒業している。その後、アメリカに渡りブライアント・カレッジで経営学士のタイトルを修めた。1941年、卒業と同時に結婚、4人の子供をもうけた。パナマに戻った彼は、父親のタバコ卸の仕事を手伝う傍ら、当時、知られていた作曲家アルトゥロ・“チノ”・ハサン・ラソに惹かれていった。

企業家としてダイナミックな活動をするなか、コスタリカとの国境に近いチリキ地方の農園で競馬うまの養育をしたり、ボクシングに興味を示していた。そして心に詩が浮かんでくると、ピアノの前に座り、曲ができあがるまでそのメロディーを探すのだった。

ところがあるとき、カルロスは、仕事上のことで“チノ”に忠告をしなければならなかった。チノは、精神的に傷つけられ「カルロスは決して作曲家にはなれないだろう」と言い切った。この言葉は、カルロスの負けん気と闘争心に火をつけた。そして最初の作品ボレロ「ノスタルヒア（郷愁）」を、続いて「君から遠く離れて」など、次々と発表。こうして彼の最高作といわれる「ある恋の物語」は1956年に作られたのだった。



歌のテーマは兄フェルナンドの妻の突然の死を悼んだものという。一つには、カルロス自身が彼女に横恋慕して、叶わぬ間柄への複雑な心情が曲に映り出ている、と解釈する人もいる。心に残る美しい曲と詩なるがゆえに、後世の人々がいろんな推測をし、いろんな解説をすることもあるのだろう。

パナマ運河のロック ともあれ、歌は残り、うたい継がれ、世界の人々の心を潤してきた。筆者も稲門会（早稲田大学の校友会）のカラオケサークルなどで、仲間から「オリジナルのスペイン語で歌ってみてヨ」と声をかけられる曲の一つだ。残念なのは、みんなは私の歌唱の素晴らしさ(?)よりも、「きれいな曲だねえ」と、曲そのものだけをホメルことだ。

2007年11月、私はそんな曲のルーツを求め、他の取材用件と合わせてほぼ10年ぶりにパナマを訪れた。成田からヒューストン経由で総計18時間の飛行旅。冷房の効いたトクーマン国際空港の建物から外に出る。ムツとした下からこみ上げてくる熱気。メガネがすぐに曇ってしまった。建物内と外気との温度差と湿度差からだ。パナマに着いたことを実感させる一つの自然現象だ。

迎えてくれたMさん夫妻の車で市内のホテルへ。Mさんは、私が特派員としてパナマに駐在していたころ（1976～1985）、チリキ州で獣医として頑張っていたパナマS G Iメンバー。当時、いろんな悩みを抱え行き詰っていたが、私の激励で立ち上がることができたという。「いつも感謝しているセニョール・シミズに、車でアテンドできるなんて、自分にとって最高の喜びです」。こんな言葉を聞くと、かえってこちらが恐縮してしまうが、昔の自分の激励が夫妻の生きる力になっていたとすれば、こんなうれしいことはない。

久しぶりの再会に、Mさんはハンドルを握りながら次々と生活の報告をしてくる。途中で激しい雨が車のフロントガラスをたたきつけてきた。雨季特有のスコールである。市内に着くころには雨も上がっていた。

それにしても——この10年余りの間の市内の変貌のあまりの激しさ！かつてビルといえば数えるほどだったのが、今はニョキニョキと20階、30階建ての高層ビルが立ち並び、さらに見える範囲だけでも30本以上のクレーンが空にそびえ、文字通り建築ラッシュを象徴している。

カルロスが「ある恋の物語」を作詞した1950年代には、ビルなどほとんどなかったにちがいない。昔の面影を探そうにもまったく残っていない。到着2日目にはパナマ運河の太平洋出入り口にあるミラフローレスの水門を訪れた。1903年、運河建設を支援するアメリカの支援で独立したパナマ運河の太平洋側の水門である。アメリカに領有されたパナマ運河地帯（ほぼ沖縄県の広さ）も1999年末に運河と共に返還された。その運河も10万トン級のタンカーが世界の海を行き交う今、手狭となり、2年前から拡張工事が始まったばかりだった。10年がかりの大事業だという。

3日目にはパナマ独立のシンボルの国旗の立つアンコン丘へ登った。アンコン丘から見下ろすパナマ市は、ニューヨークのマンハッタンを思わせるようなビル群の林立だった。カルロスはここでどんな思いをして生活していたのだろうか、当時が偲ばれてきた。



歌の取材ほかの諸用件を終えた帰国前日には、現地のS G I パナマのアミーゴたちと(Soka Gakkai International)の記念集会に出席した。参加者約500人。私はパナマ特派員時代と今回の滞在中の協力とサポートに感謝の言葉を述べたあと、みんなが喜んでくれるならと、この「ある恋の物語」をスペイン語で歌い上げた。

なんとこれにはパナマ大学で音楽を専攻するメンバー3人が、生演奏で応援してくれた。会場はスタンディングオベーション。止まらない拍手に、つい私もこの後に取材予定のメキシコ人作曲家による「ベッサメムーチョ」まで歌うサービスをしたのだった。

改めて思ったものだ——歌は世界の人々の心をつなぐ！歌は世界の人々の心を開く！

「ベサメ・ムーチョ」 私にキスして、たくさんキスして

『ベサメ・ムーチョ』(*Bésame mucho*)は、スペイン語の歌で1940年にメキシコのコンスエロ・ベラスケスによる作詞作曲。彼女はこの曲を16歳の誕生日前に作った。歌詞には「キスして」「たくさんキスして」といった表現が頻繁に出てくるが、ベラスケス自身によれば、この曲を書いた時点で彼女はまだキスを未経験で、キスとは罪深いもののように思えたという。

歌詞は、サニー・スカイラーにより英訳された。「ベサメ・ムーチョ」のタイトルは、「私にたくさんキスをして」という意味。翻訳曲名は、“Kiss Me Much”、“Kiss Me a Lot”、“Kiss Me Again and Again”などが知られている。

Bésame, bésame mucho, Como si fuera esta noche la última vez. Bésame, bésame mucho,	私にキスをして、たくさんキスをして 今夜が最後かもしれないから 私にキスをして、たくさんキスをして
Que tengo miedo perderte, perderte después.	あなたを失うのが怖い、この後あなたを 失うのが怖い
Quiero tenerte muy cerca, Mirarme en tus ojos, verte junto a mí. Piensa que tal vez mañana	あなたを抱きしめたい あなたの目を見て、私の隣にいるあなた を 私はたぶん明日あなたと別れ
Yo ya estaré lejos, muy lejos de tí.	とても遠い遠いところへ行かなければなら ないから
Bésame, bésame mucho, Como si fuera esta noche la última vez. Bésame, bésame mucho,	私にキスをして、たくさんキスをして 今夜が最後かもしれないから 私にキスをして、たくさんキスをして
Que tengo miedo perderte, perderte después.	あなたを失うのが怖い、この後あなたを 失うのが怖い



別の書き物でも触れているが、私はこの曲が得意でカラオケの十八番にもなっている思い出深い歌である。最初にみんなの前で歌ったのはブラジルから来日したSGIメンバーが国内を回っているバスの車内だった。もう40年近く前のこと。日本人メンバーとの各地での交流様子を聖教新聞の記者とし

て取材のため同乗していたのだった。

地球の反対側から来た、とりわけ元気のよいメンバーの歌で盛り上がった移動中の車内で私も何かを歌わざるを得なくなった。「それではラテン・アメリカの人々に喜んでもらえる曲を」とこの「ベサメ・ムーチョ」を歌ったのである。得意げにスペイン語で歌ったが、下手なスペイン語がポルトガル語のメンバーに分かったかどうか。まして歌の作者はメキシコ人ということが後でわかり、少々恥ずかしい思いをしたものだった。

歌とは全く関係なかったが、なぜかその後、私はラテン・アメリカの特派員に任命となった。そしてパナマに駐在していた10年間にブラジルを含めた中南米大陸の国々を何回も訪問した。とりわけメキシコは現地のSGIを応援する立場もあったので、訪問は20回近くになっている。でも残念ながら「ベサメ・ムーチョ」の舞台を意識して訪れ取材することはなかった。もっとも冒頭で述べたように、15歳の作詞・作曲者にとってはそうした舞台はなく彼女の心の世界を描き出したものと思われるが……

1994年、私は再びパナマに3ヵ月間ほど派遣された。その任務の終了を祝う食事会で私はこの歌をうたった。参加者は約300人。舞台ではなんとパナマ大学で音楽講師を務めるメンバーが創設のバンドが演奏をしてくれた。彼は私が特派員だったころにはまだ若い中学生で、私も一生懸命に激励し育ててきたメンバーだった。そんな背景からこの時の感慨はことさらに深かった。

メキシコを訪れるとよく街中でもマリアッチを見かける。民族色豊かなダンス音楽の楽団編成。5人ほどの団員は大きなつばのソブレロをかぶり、派手な刺繍の入ったユニフォームを身にまとい、ギター、バイオリン、トランペットを主な楽器にラテンの曲を演奏する。その中には必ずこの「ベサメ・ムーチョ」も入っている。レストランでテキーラを傾けながらマリアッチの演奏を聴いていると“我ラテン・アメリカにあれり”といった感慨がしみじみと湧いてくる。今も私は宴会の席やカラオケなどではこの曲をスペイン語で歌っている。



そして2013年の12月、思いもしなかったハプニングが展開した。NHKのど自慢の舞台に出場しかけたのである。(以下はホームページ「気まま随想」の12月に掲載したエッセイです)

昭島市でNHKのど自慢が開かれる——そんな記事が10月、昭島市の市報に掲載されました。市民会館(左の写真)のリニューアル記念行事の一環。会館は我が家から100メートル余り。せっかくの機会です。「ならば」と私は往復はがきで出場の申込をしました。曲



目は「ベサメ・ムーチョ」、選んだ理由は「現役時代に中南米に長期滞在していたので」としました。

11 月半ば、予選会に出場の案内状が届きました。出場できるのは250 人。後から聞いたところによると3000 人近くが申し込んだとのこと。すでにここで大変な倍率になっていたわけです。

メキシコの歌なのでソンブレロとポンチョを身にまといスペイン語で歌うつもりだと、NHKの元アナウンサーだった高校の同期仲間に話したところ、「番組としては舞台を盛り上げてくれる人を求めている。清水君は定年留学や文学紀行など話題性もありきっと予選を通過するヨ」とのご託宣。すっかり気をよくした私は多くの友人に「予選パスの可能性は高いので当日のテレビを・・・」的な案内をメールでしてしまったのです。というのも、予選会は本番前日の正午から夕方遅くまでかかり、もし合格すればそのまま夜遅くまで打ち合わせと練習、翌日も早朝から練習があるようなので、皆さんにメールする時間がないかもしれないと考えたからです。

予選会当日——250 人が1 人1 分以内の歌唱、続いて番組担当のディレクターと司会の小田切アナウンサーとの簡単なインタビュー。

ぶっつけ本番の前奏のため、どこから歌い始めてよいのか戸惑ったもののそれなりによく歌えたつもり、それに派手な衣装とスペイン語の歌は観客と審査員の目を引いたのではないか・・・なんて自分的には9 割の確率で合格



予選会の舞台の映像が館内のテレビで

を期待していたのですが、審査結果の発表で出場番号188 は最後まで読み上げられませんでした。私の勝手な甘い思い込みだったわけです。なんと恥ずかしい！！家に戻るとすぐにメールで案内した皆さんに“本番落選”のお知らせと早とちりのお詫びを書き送りました。

でも友人とはなんとありがたいもの！“私が落ち込んでいるかもしれない”と思われたかどうか、それぞれ激励と希望の言葉を送ってきてくれたのです。以下、勇気づけてくれたメールの一部を紹介してみますと：

「じえ！じえ！本当ですか？楽しみにしていましたのに残念でした」

「テレビに映らないのは残念ですが、そこまで行ったというのはやはりすごいですよ」

「落選——これも深い意味があることでしょう」

「本当に貴重な経験をされた。これからいろんな機会に話題とされたらいい」

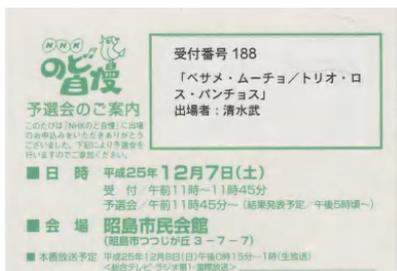
「次回に持ち越し。また次の目標ができてよかったですね」

「何でも挑戦する清水さん、次は何をやらかすか楽しみです」

「ソンブレロにポンチョ姿は傑作。『清水ここにあり』の意気込みが感じられる」

「『何もしなければ何の結果も出ない』と以前のメールにあった。まったくその通りです」
「ドン・キホーテのロマンの旅はこれからまだ続いていく。これはスタートラインだ」
「中南米・メキシコへの思い、熱き情熱に感激。勇気を与えてくださり感謝しています」
(最後の二つのメールはメキシコの友人から)

なかには私の出番が終わってすぐに帰った地域の友人からは「予選会を見てきました。



素晴らしい雰囲気です。際立ってよかったです。周りの観客から『ワ〜・・・』と声が上がりました。予選は文句なし通過ですよ。明日は鐘連打、頑張ってください」といった過分な評価メール、「清水さんの実力わかんないNHK困ったものです」なんてユーモアあふれる激励、また間もなくやってくる忘年会や新年会で歌とコスチュームの披露をし

予選会案内のはがきの上部（追ってスペイン語のタイトルのはがきが再送されてきた）

で欲しいと期待する温かな声かけもいただきました。

「東京のドン・キホーテ」も人の子です。少し落胆したものの、こんな温かな激励のメールに再びやる気が出てきました。“そうだ、予選会に出られただけでもラッキーじゃないか！ 11月の東京国際フォーラムでのミュージカル「赤毛のアン」出演に続いてなにか“舞台づいて”いる感もありますが（家内からは「あなたは目立ちたがりやだから」なんて揶揄されている）、偶然の一致です。

次のガンジーのような高邁な精神ではなくても、“何でもやってみよう”と取り組んでいくと、この年でも思わぬ面白いことに出会い、意外な展開もあると感じているところです。
You may never know what results come from your action. But if you do nothing, there will be no result.” -----Mahatma Gandhi

「自分の行動が、一体どんな結果をもたらすのか予測はできない。ただ確実なのは、何もしなければ何の結果も出ないということだ」——マハトマ・ガンジー

“見果てぬ夢”に向かって正義の道を進むドン・キホーテ。風車を悪魔の巨人と見て突進する <私の名刺のロゴです>

